

一般社団法人 MOA自然農法文化事業団

役員研修会

日 時： 令和4年2月19日(土) 13時10分～16時00分

場 所： MOA瑞雲会館1階 大ホール

◇日 程：

13：10 主催者挨拶

：20 基調講演

「みどりの食料システム戦略の実現に向けた新たな政策の進行方向」

青山豊久 農林水産省大臣官房技術総括審議官

兼 農林水産技術会議 事務局長

(質疑応答含む)

14：00 休 憩

：10 事例報告① 平井憲介 北海道旭川市

MOA 自然農法旭川普及会 所属

：30 事例報告② 森 昭暢 広島県東広島市

MOA 自然農法福富普及会 所属

：50 事例報告③ 福元雅岳 鹿児島県南さつま市

MOA 自然農法加世田普及会 所属

15：10 休 憩

：20 意見交換

：55 閉会挨拶

16：00 終 了

講師プロフィール

青山 豊久 氏

農林水産省大臣官房技術総括審議官

兼 農林水産技術会議 事務局長



1988年（昭和63年）3月、東京大学法学部卒業、

同年4月、農林水産省へ入省

入省後、経営局金融調整課長、生産局生産流通振興課長、同局農産部地域作物課長、

林野庁林政部林政課長、内閣官房内閣参事官、農林水産省大臣官房秘書課長、

農林水産技術会議事務局研究総務官などを歴任。

日本初の棚田オーナー制度の企画や食料・農業・農村基本法の作成に携わり、農林

水産技術会議事務局研究総務官在任中は、ロボット、AI、IoTなどの先端技術を

活用したスマート農業の推進や農業データ連携基盤をご担当

2020年（令和2年）8月3日、農林水産省大臣官房総括審議官

2021年（令和3年）7月1日、農林水産省大臣官房技術総括審議官 兼 農林

水産技術会議事務局長に就任

事例報告者・生産者紹介

平井 憲介 氏

北海道旭川市 MOA 自然農法旭川普及会所属

耕作面積 72 a 畑作



農協職員時代に自然農法のプロデューサーと出会い、平成26年新規就農、平成28年に自然農法の実施者として登録。美味しい農産物づくりに向け、自家採種を取り入れ、かつ、根張りのよい土づくりを目指し、土壌断面の調査研究に取り組んでいる。このような営みを通し、病害虫が減少し収量増とともに美味しい農産物が収穫できるようになり、MOAや地元スーパーに出荷し、市民の健康を願い地産地消に取り組んでいる。自然農法がさらに発展し、日本全国、津々浦々に「安心・安全で心のこもった美味しい自然農法の野菜」がもっと多く出回ることを願い、日々取り組んでいる。

森 昭暢 氏

広島県東広島市 MOA 自然農法福富普及会

耕作面積 273 a 畑作・水稻・果樹



脱サラ後、農業研修を経て、平成23年広島県東広島市に新規就農。安芸の山里農園「はなあふ」を運営し、「はなあふ」では、土づくりをはじめ自家採種、緑肥等を利用し、年間約40種類の美味しい野菜を生産。出荷先は、MOAへの出荷をはじめ道の駅、地産地消に取り組むとともに、インターネットでの販売もしている。

消費者を招いての田植、草刈り、収穫祭等の体験イベントを実施、また、近隣の有機農家とも連携し有機農業の進展に取り組み、研修生の受け入れも行い、自然農法・有機農業を通し地域の活性化に取り組んでいる。

「平成27年多面的機能発揮促進事業 中国四国農政局長表彰優秀賞」受賞。

「2016中国地域有機農業情報交換会（主催 MOA 自然農法文化事業団）視察先」

福元 雅岳 氏

鹿児島県南さつま市 MOA 自然農法加世田普及会

耕作面積 328 a 畑作

地元の県立農業高校を卒業後、有機農家を志す。

南さつま市と当事業団、MOA 自然農法加世田普及会が協働して管理・運営する市民を対象とした自然農法による家庭菜園講座「ありのまま分校」に入学。

同校卒業後、MOA 自然農法実施者に登録。加世田普及会等と連携し、自然農法・自然食の普及とともに、同市の学校給食へ自然農法農産物が導入されるなど、地産地消を通し市民の心身の健康づくりに取り組んでいる。



事例発表1

発表者 平井 憲介 氏、みなみならあーむ
(北海道旭川市 MOA 自然農法旭川普及会 所属)

1. 農場名の由来

「みなみな」とは、アイヌ語で「にこにこ笑う」という意味です。

自然農法で作られた新鮮な野菜を食べて頂くお客様に、『笑顔になってもらいたい』。という願いが込められています。

2. 経営概要

- ①所在地 北海道旭川市東旭川町 (市内にある街寄りの農村地帯)
- ②経営面積 72a 野菜作
うち ビニールハウス 50m×6.3m 9棟
- ③経営概況 平成26年 経営開始 ハウス3棟建設、無肥料自然農法開始
平成27年 ハウス4棟増設
平成31年 ハウス1棟増設
令和2年 ハウス1棟増設
- ④労働力 本人、妻、パート1名(農繁期)
- ⑤栽培品目 30~40品目(年次変動)
- ⑥主要品目 大玉トマト、ミニトマト、なす、オクラなど果菜類
えんどう豆、(さや) いんげん豆類、サニーレタスなど

3. 経営の特徴(基本的考え方)

『安心・安全に徹底的にこだわる』

『小さい面積を 効率よく』

- ① 無肥料、無堆肥、無土壌改良材であること。
(セル苗のみ購入培土使用の場合あり)
- ② MOA自然農法取得(平成27年)
- ③ 小面積 → 労働集約型作物(果菜)による土地生産性の向上
- ④ 少量多品目、複数作型 → リスク分散、作期分散 → 労働生産性の向上
- ⑤ 全量直売所出荷 → 流通経費の圧縮 → 農業所得率の向上

4. 自然農法を始めたきっかけ

就農を目指した当初は、農協職員時代の知識・経験を生かし、ごくごく普通に肥料・農薬を利用した一般栽培で生計を立てようと思っていましたし、農業研修も一般栽培農家で行いました。家族を養うことも考えると自然農法に取り組み、失敗することが怖かったわけです。

たしかに研修中から有機農業・自然農法自体には興味があり、『食の安全』を

気にしていたことは事実ですが、経営が軌道に乗ってきたら徐々に一般栽培から切り替えれば良いと思っていました。

いざ、就農地が決まり経営開始が目前に迫ってきた頃も一般栽培にするか、有機農業にするか、それとも自然農法まで飛躍させるか、を迷っていましたが、『食の安全』のため農薬・除草剤は使用しないことを決めていました。（後は肥料や堆肥をどうするかです。）

その後、文献・資料を読み進めるうちに、肥料を与えることのデメリットにも気付かされ、就農当初から無肥料栽培にすることにし、現在に至ります。（ホームページより抜粋）

5. 自然農法の課題

①技術の習得に時間がかかる

・・・周囲に実践農家がないため、知見なし。多品目を網羅するのが大変

a) 無肥料なりのコツがある

b) 品種選択が難しい

c) 整枝、剪定、水管理 ～ 一般栽培と違う（部分がある）

※作物への観察力、植物生理に関する理解が必要

収穫量が計算できない

・・・病害虫被害の収量減が、いつ発生するか分からない。

d) 経営の長期的戦略を立てづらい

②労働生産性（時給単価）が上がりづらい

a) 雑草管理作業の増加（雑草には良い面もあります）

b) 直売（庭先、ネット）関連の作業増加

6. 自然農法のメリット

①肥料、農薬代がない（直売関連経費は増える傾向にありますが・・・）

②肥料、農薬、除草剤を散布する手間がいらぬ（その分、雑草管理に苦労しますが・・・）

③雑草を有効活用できる

④肥料、緑肥として

a) 土壌被覆として（微生物活性、風雨の緩衝材として）

b) コンパニオンプランツ（混植）、バンカープランツ（おとり）として

⑤お客様に喜ばれる。← とても大切です。

⑥人と会う機会、他産業との交流が増える ← 経営の肥やしになります。

⑦農産物自体が高付加価値 ← 差別化につながります。

7. 将来展望（口頭説明）

以上

事例発表2

発表者 森 昭暢 氏、安芸の山里農園はなあふ
(広島県東広島市 MOA 自然農法福富普及会)

2011年に新規就農し広島県東広島市で営農を開始。屋号の「はなあふ」とは春夏秋冬の頭文字。旬を大切にし、旬の活動を行い、旬のものをお届けし続けていきたいという想いを込めている。

人と生態系の調和する持続可能な農業を目指して、地域の循環する資源・エネルギー・タネなどを利用した作物生産、多様な方との共同作業や新規就農者の育成などを通じて、地域の食と農業を未来に繋ぐ取り組みを行っている。

1. 経営の概要

- 1) 栽培年数 有機農業実施 11年目(慣行0年)
- 2) 耕作面積 実施面積 273a(圃場数 33枚)
- 3) 主要な作付け作物 露地野菜(年間40種類程度)、稲、果樹(梅、柿、栗)
- 4) 労働力 専業従事1人、兼業従事1人、農業研修生1人、パート1人
- 5) 農機類 トラクター21・25ps、4条田植え機、コンバイン、管理機6ps、うね成形機、フレールモア、スパイダーモア、小型野菜乾燥機、小型製粉機等

2. 有機農業実施の動機と目標

都市と農村を行き来する生活の中で、食べ物と将来の暮らしへの疑問が生じ、2009年に持続可能な農業を志すことを決意。自然の仕組みを最大限に活かす自然農法を通して、今ある農地生態系を保全しながら、一人でも多くの人の健康を支え続ける「食」と「暮らし」の実現に貢献していくことを目指す。

緑化・建築資材メーカーを退職後、(公財)自然農法国際研究開発センターにて、野菜を中心とした栽培技術など自然農法について学ぶ。

2010年、農事組合法人よしわにて水稻栽培(一般栽培)について学ぶ。合わせて13ヶ月の研修の後に新規就農。

3. 生産技術の考え方、基本とする技術

1) 土づくりについて

土づくりのベースは、自然農法による草生栽培(リビングマルチ)。田畑では、無限の地域資源である雑草(緑肥)を活かし、これを土に還すことで豊かな土壌を育てている。

農園では、土壌の栄養バランスを整え、微生物の多様性を豊かにするために、土壌診断を定期的に行っている。

診断の結果に基づき、植物性の堆肥や有機質肥料(米ぬか、油粕など)、鉱物ミネラルで補っている。作物は、健康な土壌にのびのびと根を張ることで健康

に育つ。

2) 病害虫対策について

健康な作物が育つ条件をいかにして整えるかが大切。地力を維持する土づくりと施肥管理、生物多様性を保全する圃場管理、生命力の強いタネの利用、旬を意識した栽培を一体的に行うことで病害虫対策になる。具体的には、以下2つの視点で農作業の手入れを行っている。

◎作物の病害虫耐性向上に向けた栽培管理

作物が土中にしっかり根を張り、必要な時に必要な量だけ養水分を吸収していければ、作物が健康に育つ条件が整う。

上述の土づくりに加えて、根張りの良い品種を選択したり、根張りが良く丈夫な苗を育てる育苗管理などを行っている。

◎生物多様性を保全する圃場管理

作物の病害虫被害は、害虫・病原菌の密度が一定以上になると現れる。そのため、特定の害虫・病原菌のみが増加しすぎない様に、天敵・拮抗菌など多様な生き物の住処や生活史を意識した耕種管理が大切になる。

田畑への有機物投入（C/N比の高いものと低いものを組み合わせる）の他、インセクタリープランツや対抗作物の利用、輪作、間作（当農園の場合は草生栽培）などを行っている。

3) 種苗について

自然農法の品種、および固定種を中心に、お客様から評判の良い品種（F1種が中心）を利用。次世代にタネを引き継げるように自家採種も行っている。

4) 燃料について

カーボンニュートラルの実現に向けて、トラクターの燃料はバイオディーゼル燃料（BDF）を使用。地域の廃てんぷら油を回収し、当農園でろ過精製したものを使用。

5) 生き物調査の実施

田畑では、生き物調査を行っている（西日本農業研究センターや広島大学と連携）。農業は自然破壊の一面もある。

一方で、里山の様に手入れの行き届いた自然環境は、生物の多様性が豊かな環境でもある。

里山をイメージしながら、農業活動を通して、現存する田畑の生き物を守り、その生息環境がより良くなる保全技術を模索している。

4. 出荷、流通

提携販売、および地域での直売に力を入れている。個人宅配、飲食店、自然食品店、教育施設、福祉施設、JA、道の駅に出荷の他、定期的に地域のマルシェに出店。

5. 経営の現状とビジョン

自立できる農業、ゆとりあるライフスタイルを目指し、高効率・コンパクトな農業経営として「実働 8 時間/日、週休 1.5 日、農業所得 400 万」を目標に掲げ、就農後 3 年でその数字を達成。その後は、右肩上がりの数字は求めず、安定性を追求。

6. 共同活動

農作業は、農業研修生（受入れ 11 名、うち就農 10 名）、インターンシップの学生（受入れ校：広島大学、愛媛大学、西条農業高校、IWAD 環境福祉専門学校）や農業体験参加者（1 回/月程度開催）、農福連携（NPO 法人やすらぎ作業所）による福祉作業所の利用者など、志を同じくする方々と一緒に行っている。

販売は、エム・オー・エー商事をはじめ、あおびー倶楽部（伝統野菜・東広島青なすの生産部会）、湖畔の里 TSUNAGU やさい（道の駅有機農家出荷コーナーを管理する組織）など地域の多様な方々と連携して取り組んでいる。

栽培技術は、MOA 福富普及会をはじめ、広島県有機農業研究会、日本土壌協会、自然農法国際研究開発センター、広島土壌医の会などで研鑽を積んでいる。

人口減少時代は、ヒトとのつながりが大切。多様な方々との緩やかな繋がりの中で、ここぞという時に力を合わせていく。令和においては、協働・分業、助け合いから生まれる新たな価値を創造していきながら、時代に即した農業展開を目指している。

以 上

事例発表3

発表者 福元 雅岳 氏

(鹿児島県南さつま市 MOA 自然農法加世田普及会)

1. テーマ:「おいしいね〜 が聞きたくて」

育てる人・食べる人・地域の日常に、ほんのり豊かに幸せに

2. 経営概要

- ①栽培規模: 自然農法(有機 JAS 認証) 328 a
- ②栽培作物: カブ、サトイモ、ダイコン、ホウレンソウ等
- ③流通先: 自然食品店、地元スーパー、マルシェ等
- ④労働力: 本人、妻
- ⑤就農開始: 平成 28 年〜(就農 6 年目)

3. 地域の概要

南さつま市は、鹿児島県薩摩半島の西南端に位置する街で、日本三大砂丘「吹上浜」や九州百名山にも選ばれている「金峰山」など、雄大な自然に囲まれています。

農業は、鹿児島県南部にあるという温暖な気候を活かし、県ブランド指定第 1 号の加世田カボチャや金柑春姫、超早場米の金峰コシヒカリなど農産物の生産が盛んです。

4. 農業との関わり

原点は、幼いころ家庭菜園をしていた祖父母が育てた採れたての新鮮な野菜の味に感動し、美味しい野菜を食べたい、育てたいという思いから農業の道に進むことを決めました。

地元の加世田常潤高校(有機生産科)に進学後、タキイ研究農場付属園芸専門学校を卒業し、かごしま有機生産組合の直営農場で野菜栽培の仕事に 3 年間従事し、その後、独立して就農しました。

5. 自然農法との出会い

南さつま市では、環境保全型農業と健康元気都市の推進に向けて平成 27 年から自然農法体験学校ありのまま分校を開校しています。

ありのまま分校の分校長である加世田普及会の吉田さんとは、以前の職場時代に自然農法の魅力について聞いていました。

吉田さんを介して MOA とご縁をいただき、休日にありのまま分校のお手伝いに参加する中、携わる人たちの温かさを感じ、翌年には受講生として参加しました。

就農する前にありのまま分校に参加でき、行政や地域の方、MOA 自然農法の生産者ともつながり、就農がスムーズに行えました。

以前の職場では、有機農業を実践していて本当に自然農法で作物ができるのか不安でしたが、ありのまま分校や MOA、九州内の自然食品の流通会社の紹介で自然

農法を実践している農家を見学し、「これならできる、やってみたい」と思いスタートしました。

6. 栽培について

以前勤めていた有機組合では、堆肥や有機質資材を多く投入して収量をあげることが大事にしていました。

独立後はお客様と接する機会も増え、よりおいしく、安心・安全を目指そうと思い、土の偉力を発揮できるよう緑肥のみ使用して作物の品質を高めていくように努めています。

また、適地適作、適期適作を意識し、作物の特性を捉えて、試行錯誤しながら勉強しています。

夫婦で取り組んでいて、納得できる作物ができたときは嬉しく、また、消費者から直接、「おいしい」という言葉をいただくと本当に嬉しいです。

そのために、出荷の際は、野菜を入念にチェックし、少しでも良くないと思ったら出荷しないよう心がけています。それが流通業者、消費者への信頼に繋がると考えています。

7. 地域への普及活動

一昨年、南さつま市では、行政の働きかけで自然農法や有機農業を実践している農家と共に学校給食への納入や新規就農者への支援を目的に自然農法・オーガニック野菜推進委員会を設立しました。

昨年からは市内の小中学校に学校給食へ農産物の納入が始まり、それをきっかけに小学校への食育授業を実施しています。

また、母校である加世田常潤高校の授業の一環で、学生とカブのB品を使用したドレッシングを共同で製造し、学園祭で販売するなど、学校と共に地域へ自然農法の普及など行っています。

来年度、南さつま市は、みどりの食料システム戦略のオーガニックビレッジを宣言し、有機農業の事業を幅広く展開していくことを計画していますが、現在、「自然農法のまち、南さつま」に向けて関係者で語り合いが始まっています。

8. これからの夢

これからも自分たちが納得するおいしい野菜を作り続け、多くの人に食べていただきたいです。

そして、自然農法を実施する農家が増え、同じ志を持った仲間と共に自然農法農産物を学校給食や地域に供給していきたいです。

その結果、健康で心豊かなまちとなり、南さつま市から鹿児島、日本、世界へと広げていきたいです。

以上